2024年5月5日 久宝教会 復活節第6主日礼拝メッセージ

「あなたは独りではない」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書　16章 25−33節

「5−1＝6」。この数式を見て、何かお気付きになることはありますでしょうか。「5＋1＝6」の書き間違い、もしくは「5−1＝4」の計算間違いではないか、と考えるのが、小学校の算数の勉強でしょうか。私がこの不思議な数式に出会ったのは、広瀬浩二郎（ひろせこうじろう）さんと相良啓子（さがらけいこ）さんの書かれた『「よく見る人」と「よく聴く人」』という本の中でした。広瀬さんは 13 歳で失明した視覚障がい者で、相良さんは 19 歳の時に聴力を失った聴覚障がい者です。「通常は」と言いますか、見ることも聞くことも出来る「多数派」の人たちの感覚では、視覚障がい者や聴覚障がい者は「見ることの出来ない人と聴くことの出来ない人」と思いがちですが、そうではなくてむしろ「よく見る人」と「よく聴く人」でもあると言うのです。

「5−1＝6」という不思議な数式は、広瀬さんが考えられたもので、「五感のうち一つを使わないことにより、人間は新しい価値観・世界観に出合う」（前掲書 137 頁）という広瀬さんの信念を表したものだそうです。例えばスマートフォンが普及してからは、いつでもどこでも電話だけではなく、電子メールも、動画までも見られるようになりました。目から入って来る情報の量が格段に増え、現代社会は五感の内でも視覚が優先される社会になっているとの指摘もありました。そのような生き方が「多数派」を占めている現状の中で、使われなくなってしまっている感覚、使うことを忘れてしまっている感覚も多くあるのではないか。例えばテレビや動画は、表情や場面はよく伝えてくれますが、匂いや触った感覚は伝えてくれません。ずっと自分の好きな音楽や動画を聞き流していたら、新緑の季節になって賑やかになって来た虫たちの音や、鳥たちのさえずりも耳には入って来ません。視覚障がい者の方々は白杖で地面を叩きながら、単に自分の前にぶつかったり躓いたりする障害物がないかどうかを確かめているだけではなく、地面が硬いか柔らかいか、小さな石があるのかないのか、また返って来る反響音でその場の空間の広さを把握したりもするのだそうです。そのような感覚は、目が見えて、耳が聞こえるにもか

かわらず、私などは普段から全く意識したことのない感覚でした。

広瀬さんが言うには、目が見える人は道を歩く時、目で簡単に道の安全を確認できるので、音・におい・風などを無意識のうちに無視している。聞こえるはずなのに、聴いていない。そういったことが意外に多いのではないか。「晴眼者（目が見える人）＝五感」「全盲者＝四感」というのは浅薄な思い込み（多数派の錯覚）であり、じつは両者は「使っている触覚の割合が異なるだけ」なのだ、ということでした（140 頁）。目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりするけれども、全身を使って、その他の感覚を澄ましてこの世界を感じ取って生きる……。そこには「多数派」の人たちが見落として忘れてしまっているものが、たくさんあるのではないかということを、改めて思わされました。

さて、今回の聖書のお話は、イエス様が敵対者たちによって逮捕される前に、いわゆる「最後の晩餐」の席で、弟子たちに対して語られた長い長い「お別れの言葉」「遺言」の一部でした。14 章から 17 章まであり、途中で「立て。さあ、ここから出かけよう」（14：31）と言いながらも、また座り直したのか、立ちあがったままだったのかは分かりませんが、延々とイエス様が一人で語り続けられたかのように「ヨハネによる福音書」はまとめられています。

自分はこれから敵対者たちによって逮捕され、そして恐らく十字架につけられ、殺されていくだろう。そのような形でこれまで行動を共にして来た弟子たち、仲間たちと別れなければならない。事の次第がまだ飲み込めていない弟子たちに対して、イエス様は何度も安心するように伝えつつ、今回の最後の 33 節では、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」と断言されています。どうしてそれだけ力強く断言することが出来るのか。その一つ前の 32 節では「見よ、あなたがたが散らされて、自分の家に帰ってしまい、私を独りきりにする時が来る。いや、すでに来ている」と言っています。弟子たち、仲間たちから裏切られ、見放されるということも、薄々感じていたどころか、ハッキリと分かっていたように言われているにもかかわらず、そんな弟子たちを恨むので

もなく、気落ちするのでもなく、「私は独りではない。父が、共にいてくださるからだ」と言い切っています。「父である神が、常に共にいてくれるから、何があっても大丈夫」……。そのような命の神様に対する篤い信頼が、イエス様の根幹にあったということなのでしょう。

イエス様の言われたこの「大丈夫。私は独りではない」という言葉は、イエス様のことだけを表しているのではなく、私たち一人一人、全ての人々のことも表しています。ですから、「私は独りではない」という言葉は、同時に「あなたは独りではない」ということも表していると言うことも出来るのだと思います。とはいえ、この事を私たちは普段どれだけ事実として受け止め、信頼しているでしょうか。それこそすぐ隣にあるのに見ても見ず、気付いていない、ということはないでしょうか。例えば、私たちは普段、神様にお祈りする時に、何をお祈りしているでしょうか。「今日も一日、元気に過ごせますように」「病気や事故がないように守ってください」「仕事や勉強がうまくいきますように」「恋人や友達や、よい出会いに恵まれますように」などなど、数え出したらキリがないのではないかと思います。ですが、それらの願いはいつでも聞き入れられて、叶えられるとは限りません。信仰に篤く、真面目で、健康に気をつけていても、予期せぬ病気にかかったり、事故に遭ったりすることはあります。親しい家族や友人たちとの別れということもあります。また望んでいなくても戦争に巻き込まれることもあります。何故でしょうか。

私たちは、自分の願い通りに事が運んでいる時、「これらが与えられたのは、神様のおかげです。ありがとうございます」と感謝することは、簡単なことかと思います。その一方で、自分の願いが叶わずに、願わなかったことに見舞われた時には、神様から見限られ、見放されたと感じ、自分が犯してしまった悪いことに対する罰を受けている、報いを受けていると感じてしまうこともあるのではないでしょうか。しかし、聖書は「善いことをした人には善いことが起こり、悪いことをした人には悪いことが起こる」というような「因果応報」の考え方を否定しています。

もし聖書が「因果応報」を説いているのであれば、神の子であったイエス様は何故、仲間たちからも裏切られたのか。神と人とを大切にし、自身は枕する所もない

程に、持てるものを与え続けた末が、十字架での処刑だったというのでは、あまりにも報われなさ過ぎるのではないか……。そうではなく、聖書が一貫して伝えているのは、いつでも、どこでも、どんな境遇にあっても、命の神はあなたと共にいてくださるということ。クリスマスに生まれたイエス・キリストは、「インマヌエル（私たちと共にいる神）」だということです。

逮捕される直前のイエス様が言われた「私は独りではない。父が共にいてくださる」という言葉（16：32）。この言葉に励まされ、反対者たちや困難な状況に囲まれても、力強く信仰を守り抜き、信念を貫いた先人たちが、歴史の中には数多くその名を残しています。とはいえ、時代を経るにつれて脚色もなされていくでしょうから、実際にそれらのお一人お一人が、恐れず迷わず雄々しくだったのかどうかは分かりません。けれども、恐れたり、迷ったり、悩んだりしながらも、それでも「神様が共にいてくれるから、自分は独りじゃない。だから思い切ってやってみよう」と思って、決断し、行動することが出来た。そういう小さな事実の一つ一つの積み重ねが、歴史を形作り、今に至っているのではないかと思います。

自分の力で様々な事が出来る時には、隣におられる神様の存在を忘れていたり、気付けていなかったりするのかもしれませんが、自分の力の限界を感じたり、予期せぬ状況に陥ったりした時には、自分を超える神様にすがりたくなったりします。しかし、私たちの思いや態度を越えて、命の神はこれまでも、今も、そしてこれからも、いつも共におられます。「私たちは独りではありません」。だからあなたもまた、決して独りではありません。その事実を全身で感じ取り、そして受け止めながら、私たちは今日もここから神様と共に歩みを進めて参ります。